

# 保育科学生に見られる若者像に関する一考察

堀 建治\*

## A Consideration of Youth Images in Students in the Childcare Department

Kenji HORI

### 1. はじめに

かつて筆者は同題目にて、当時の状況から保育科学生の抱くイメージとその時代の若者像とを重ね合わせて考察を行った<sup>①</sup>。研究発表を行ってから8年余りが経過しているが、先の発表以来、時代背景、そして学生の状況と比較しても、変化の余りの大きいことに愕然とすることすらある。「十年ひと昔」とは、すでに死後と化しており、時代の流れ、変化は5年、否、3年、あるいは1年と確実にサイクルは縮んでいるとの実感が強い。

2001年には筆者を含め、日本保育学会自主シンポジウムにおいて、保育者像の方向性について議論を深めた<sup>②</sup>。そこでの論点は「人間性重視か」、あるいは「知識・技術重視か」の2点に集中する結果となった。本シンポジウムは保育者像という限られた枠内での討議であるため、若者像とは直接的なかわりはないものの、「人間性重視」という点では、本研究の中心課題である若者の姿をとらえることに少なからず有効的な貢献ができる議論が活発に交わされたと評価される。

そこで本研究ではこれまでの成果を踏まえ、さらに学生の変容する様を、他の関連分野との研究結果を比較、考察することを通じて、将来、保育者をめざす若者の姿を浮き彫りにすることを試みるものである。前回の考察において、若者である学生と教員間に横たわるジェネレーションギャップを嘆くことなく、学生のありのままの姿を理解することを目的としたが、そのねらいは十分に達成されているとは言えない。本研究が教職員と学生、相互理解に資するものになれば幸いである。

### 2. 研究の方法

研究の方法については、主に文献研究、インターネット上で公開されWeb資料等を中心に分析、考察を行った。

### 3. 研究の結果及び考察

#### (1)「思い出づくり」はつながり確認作業？

先行研究ではいわゆる「プリクラ」<sup>(注1)</sup>を通じて保育科学生に特化した形で若者像を考察し

---

\* 鈴鹿短期大学

た。その姿はさながら「思い出」に抛り所を求める異様な学生の姿を目の当たりにすることになった。先行研究発表後の状況はどうなったのであろう。発表当時（1998年）の状況は、いわゆる使い捨てカメラ全盛であり、まさに若者ひとりひとりが総カメラマン状態であった。今日では廉価なデジタルカメラの出現やカメラ付きケータイ<sup>（注2）</sup>、あるいは写した写真そのものが簡単にプリントできるという手軽さも伴って、国民全員が総カメラマン状態になっていると評して過言ではない。日常風景を記録に留めることが、もはや日常生活のひとつまになっているのである。

さて「プリクラ」は、これまでにいくつか流行してきた物のように霧消、下火になると思われたが、現時点でも街の至る所で「プリクラ」をいとも簡単に見つけることができるほど、浸透したツールになっている。前述のとおり、若者の間でデジタルカメラ、あるいはカメラ付きケータイの出現が新たな「プリクラ」文化の創造、そして発展期に入る様相を呈した感がある。

その「プリクラ」が若者の日常生活のひとつまに入っている証左のひとつを挙げよう。養成校、あるいは高等教育機関に勤務する者ならば誰もが一度は目にしたことがあるはずである。机の上に、細かく切られた、表面が光沢を帯びた紙、それこそが「プリクラ」の残骸である。加えて、学生ひとりひとりが写真を貼り付けるためのノート形の「マイプリクラ手帳（ノート）」なるものを持参している。これらの点からも8年を経過した今、「プリクラ」そのものが完全に市民権を得て、さらに「ケータイ」同様、学生たちの重要な日常コミュニケーションツールとして確固たる地位を築いて存在しているのである。前述のとおり「プリクラ」という、たった1センチ四方の写真に写された学生の様子を「思い出にすがっている」と指摘したが、一方でその姿には利己的な姿は認められないと結論付けた。その状況は基本的には、今も変わっていない。むしろ、後述するように学生たちにとって、極端な表現ではあるが、命の次に大切なもののひとつになっている。

「プリクラ」には残念ながら「前向き」という言葉が不釣合いな面が指摘される。少なくとも撮られた「プリクラ」に失敗はないし、撮影したものからさらに進んで次回はよいものを撮影しようという気持ちは「プリクラ」からは起こらないからである。「プリクラ」はパスポート、あるいは運転免許証で使われる写真と違い、一発勝負でないところが特徴である。つまり、一度撮影した写真が気に入らなければ、何度でも撮影可能であるし、場合によっては背景、フレームその他を最初からやり直しの機能が付されているからである。

「プリクラ」は若者が言う「まったり」とした雰囲気では撮影できるところが人気の秘訣なのかもしれない。緊張を強いられる一発勝負感が乏しい分、当然、今度はもっといいものにしようという悲壮感は少なくとも「プリクラ」には存在しない。そこで「前向きに」、あるいは「一生懸命」とやっきになったところで、自分たちが満足する「プリクラ」は撮影できないことは若者自身が知っていることである。「プリクラ」の撮影プロセスを現在の若者像と重ねて見ると、重複する点がいくつか認められる。これまでの保育科の学生は一生懸命さ、明るく前向きなところという特徴があったものの、「一生懸命さ」を馬鹿にする学生も少なくない状況にある。「前向き」という言葉も場面によって、学生には陳腐なものに聞こえるかもしれない。とにかく汗をかくこと、あるいは努力することを軽視する者も増えている

ところで、「プリクラ」も「ケータイ」も人間関係の希薄さを指摘する格好の標的となっているが、学生自身、自分たちが希薄だとはとらえていないところに、我々大人との差異を見出せる。横道にそれるが、ここで筆者の勤務校でのエピソードを披露する。大学主催の宿泊合宿と

して某県の山間部へ出かけることとなったのだが、合宿先のホテル近くになるとバス車内が騒然としてきた。騒然とした理由は、他でもない。「ケータイ」の示す3本のアンテナ様の棒線が、画面上から消え、「圏外」表示に変わった途端、ほとんどの学生の顔から笑顔が消えるのと同時に、怒号とも悲鳴ともつかぬ声に車内が包まれた。これは筆者の乗車したバスのみならず、他のバスでも同様であったと他の教員から耳にした。

その様子を目の当たりにして、改めて彼ら・彼女らの友人関係は希薄どころか、目に見えない強固な電磁波線でつながっていることを改めて確認できたことは幸いであった。さらに余談であるが帰路の車内で、再び「ケータイ」が受信可能となるやいなや、一齐に「ケータイ」画面に食い入り、カチカチボタンを押す様にも驚かされた。その集中力を通常の講義で発揮してもらえないかと感じたのは筆者だけだろうか。彼ら・彼女らにとっての「ケータイ」の存在はもはや欠くべき存在であり、依存的を通り過ぎ、ある種の「お守り」の様相を呈しているとは言い過ぎだろうか。「ケータイ」にせよ、「プリクラ」も、21世紀型の「お守り」ととらえることができると思われる。

## (2)親友はいなくても当然？

学生は本当に友達がいないのかという点については筆者の勤務校にて実施した調査で、大学への期待として「友人ができる」を挙げたものが全体の約30%いたことは特筆に価する<sup>(3)</sup>。将来の進路に役立つ教育を受けることを目的として入学する者が全体の約6割という数字と比較しても、友人のあるなしは学生にとって大きな関心事であることが窺い知ることができる。

ところで前回の研究では、深い付き合いをする、一生かかわっている友達という意味での親友はいない点を論述した。近年、さらに学生同士の様子を観察していると、ひとりで過ごす、あるいは集団の輪に入りたがらない、あるいは複数人とかかわることが苦手な学生を多く見受けられる。大人としての範疇に位置づけられる学生に対して、無理矢理友達の輪に入れ、友達を作れということも筋違いのようでしかたがない。しかし、調査にも明らかなように友達がほしいという事実は学生の正直な思いであろう。

では、なにゆえ友達ができない、あるいは友達の枠を超えて親友はいないのかという点については神田が貴重な指摘を行っている。氏によると、親友とは戦友のようなもので、艱難辛苦をともにし、お互いの醜い部分をさらけださないような環境下でなければ、絶対的な信頼感、あるいはそれを基盤とした親友は生まれないと述べている。そして豊かさになった今、辛苦なこと、面倒なことを避けるという風潮そのものが、親友が生まれない土壌を作るとともに、それはリスクを回避する傾向にある社会を反映するとの示唆に富む指摘を行っている<sup>(4)</sup>。

確かに神田の指摘は正鵠を得ており、筆者も学生との切羽詰った相談事を受けているとき、あるいは実習でのトラブル相談、あるいは就職相談などを受けているときに、ふとこの指摘を思い出すことがある。学生にとって、一教員に思うところをさらけ出すことは、大変なリスクであり、苦痛であることは想像に難くない。それがたとえたわいのないことであっても、彼ら、彼女らにとっては深刻な問題なのである。ただし深刻な相談を受けてからは、学生の接し方がある種の「友達関係」になっていることに気がついた。まさに学生が辛さを乗り越え、教員とのある種の親友（戦友）関係が結ばれるというプロセスを考えると、なるほど合点のいく話である。教員への相談などは、先に述べたように学生にとってリスクそのものであり、「苦しさ」、「つらさ」という気持ちを披瀝することであるもの、それがかえって親友ともなるべき第一歩となる、ある種のイニシエーションを化している。それが友達関係にも敷衍されると、さらに

学生同士、良好な関係が構築されるのではないと思われる。これは友人関係の構築だけでなく、前述した教員とのかかわり、そして将来、学生がめざす保育現場での人間関係構築のベースになっていくものを考えられる。

ところで、保育科学生として重要なこととして、各種学外実習における子どもとのかかわりがある。筆者は保育ソーシャルカウンセリングという技法から、実習生が子どもとのかかわりをどのようにとらえるかを考察した<sup>6)</sup>。保育ソーシャルカウンセリングとは子どもへの共感、受容、傾聴というカウンセリングをベースとして、その背景にある社会福祉的な援助技術を含む概念である。つまり子どもへの気づき、理解がさらに子どもの背景となる生育環境、あるいは保護者への理解へとつながっていき、最終的には自己の理解へと昇華される考え方が保育ソーシャルカウンセリングの骨子である。

他人である子どもを受け容れることは学生自身にとっても難解であり、簡単ではないことは学生の実習記録からも読み取ることができる。同年代の友人のみならず、年齢性別を問わず、学生自身が自身の気持ちを伝えることに抵抗感を感じていることが理解できる。換言すれば、学生の大半は人との距離感で悩んでいる状況とも言える。将来、自身が向き合うべき子どもだけでなく、その背景である保護者を理解するには、まさに親友(戦友)体験を学生時代により多く積んでおくことが重要ではないだろうか。それを裏づけするエピソードとして、筆者が卒業生でもある現役保育者との会話の中で、保護者とのかかわりを尋ねた。その対応が我々とのかかわりと軌を一にしていることに気がついた。今後の学生の人間関係をとらえるひとつの視点として検討していくべきではなかろうか。

### (3)「かわいいイズム」の終着点は？

前回の発表において、「かわいい」と発する若者の姿を宮台らの研究を援用した上で「かわいい」という言葉がすべてを消し去ってしまう危険性を指摘した。「かわいいイズム」は健在であり、さらに「エロカワ」、「エロかつこいい」<sup>(注3)</sup>などという、意味不明な言葉まで出ている。価値観そのものをあたかも、トランプのごとく、根底から覆してしまう危険性を「かわいい」という言葉は有している。この点については四方田が大学生へのアンケート調査を踏まえて、現在の大学生は「かわいい」という言葉に対し、複雑な両義性を有しているとの示唆に富む指摘をする。「かわいい」という言葉には魔術的な魅力がある反面、ある種の不快感を生じる状況、つまり自分が不用意に「かわいい」と言われるような場面、あるいは「かわいい」と思えない自分がそこにいるという大学生の複雑な思いを分析した結果から両義性を言及している<sup>6)</sup>。そして四方田は第1章で述べた「プリクラ」と「かわいさ」との関連性にも言及している。「プリクラ」には自分たちの秘密を物質化することにより、「かわいい」文化を飛躍的に拡大、「かわいい」文化を構築する必要不可欠な装置との位置づけをしている<sup>7)</sup>。

ところで「かわいい」の究極の終着点として、消費社会の終着点ともとらえることができる。ボードリヤールはある集団の同質性を生み出すものとして、他の集団との差異であり、差異化したシステムは集団の統合を固めるもろもろの差異の交換なのであると述べている。そして巨大な消費システムの中での差異は、諸記号の社会化された交換となり、消費という巨大な連合体の中で交換されると論じている<sup>8)</sup>。ボードリヤールの言説を援用すると「かわいい」という現象は、元来個人レベルの価値観である。それが「かわいい」という共通コードを他集団と共有することによって価値観を「交換」される。最終的には「かわいい」という現象の消費が、言語活動とイコールとしてとらえられる。つまり「かわいい」という言葉自体、消費することを

意味し、消費することで異質なものが同質化していく様相は、現在の若者の状況と重なりあうところが多いものと考えられる。

前述のように、終着点として消費社会の背景を論じたが、消費社会の落とし子的な問題として、現在、ニート、あるいはフリーター<sup>(注4)</sup>と呼ばれる若者への問題とのかかわりを指摘しなければならない。若年層のニート、あるいはフリーター問題に関して、日本で始めてニートの実数を発表した小杉が大学を卒業した数年間、「自分探し」の傾向が強くなってきているとの興味ある示唆を行っている<sup>(9)</sup>。

かつてエリクソンは、社会的責任、義務が猶予される青年期を「モラトリアム」と称したが、さらに進めて小此木啓吾が選択を先延ばしにする新しいタイプの人間の出現に「モラトリアム人間」と称した<sup>(10)</sup>。両者の指摘は現在のニート、フリーター問題と大きくかかわっているが、前述の指摘どおり、まさに「自分がかawaii」という究極の形態が「モラトリアム人間」ではないだろうか。

大学内でも、何もせずブラブラする学生を見て、我々はいよいよ怠慢という視点でとらえがちであるが、「自分がかawaii」ため、「かawaii自分を守る」ためのある種の防衛的行動なのかもしれない。「かawaii自分」がどう進んでいくのかは彼ら自身しか、その答えを見出せないのである<sup>(11)</sup>。

もちろんニートになる階層も様々であるが、特に高学歴になればなるほど「自分探し」問題となっているとの指摘がある。「かawaii」とニート問題は、一見かかわりのないように見受けられるが、根幹部分でのつながりは見逃すことはできない。この点にかかわる分析は、紙面の都合上、別に譲ることにする。

#### 4. まとめ 一本当の若者像はどこに？

我々、大人側が語るところの若者像は、ある面、「作られる」印象が強い。「作られる」ことによって、「若者とはこういうものだ」という、「あるべき論」に摩り替わることも多い。当然、そこで作られたイメージで語られることに学生自体も嫌悪感を抱くことになるが、これは保育者像にも当てはまることだと思われる。この点に関しては、2003年度の大学卒業論文として、メディアから発信される若者像と自分たちの姿とのギャップを示す成果が発表されている。卒業論文とは言え、現役大学生が感じたことが、ありのままの言葉としてまとめられており、大人側から見た若者像とは一線を画していることが読み取ることができる。日常、自分たちが感じている違和感をもちろん、「ひとりよがりの若者像」に対する痛烈な批判を寄せている<sup>(12)</sup>。確かにこの大学生が指摘するように、大人が作り上げた固定された、そして流行語大賞のようなシンボリックなイメージで学生をとらえることは危険である。これは保育像をとらえる際にも注意すべき視点である<sup>(13)</sup>。

本研究では、前述の指摘ではないが「ひとりよがり」の指摘であることも十分認識している<sup>(注5)</sup>。若者であると同時に学生である彼ら・彼女らひとりひとりの「生き様」そのものが、学生の人生観の形成に影響を及ぼしている。我々の目の前にいる学生たちをひとりの若者として理解する気持ちと一歩余裕をもってかかわっていくことが、養成校に身をおく我々の使命ではないかと思われる。

〈付記〉

本研究は、日本保育学会第59回学会 (2006年 5月21日、北海道浅井学園大学)にてポスター発表したものに加筆修正を加えたものである。

〈注〉

- (注1) 「プリント倶楽部」の略称。ただし「プリント倶楽部」そのものが商標であるため、「シール写真」と呼ばれることもある。本研究で「プリクラ」とはプリント倶楽部、あるいはそれに類する機種で撮影されたシール写真の総称とする。
- (注2) 携帯電話の多機能性を示すメタファーとしてカタカナ表記となっている
- (注3) 「エロかつこいい」、「エロカワ」とは、「エロくて格好がよい」、「エロくてかわいい」の略称。倅田來未に代表される女性をいう。倅田の延長線上として若者に絶大な人気を誇るあゆこと浜崎あゆみがいる。エロ、つまり女性としての性的な魅力持ちつつも、男性に媚びへつらうことのない姿を「エロカワ」と評しており、現在の女性の魅力を語るには最高の称号とも言われている。
- (注4) ニートとフリーターについては、厳密なところでは、区別しなければならないのだが、本研究では両者の抱える根本的な問題として共通している部分が散見されるため、同系列として扱った。この点の詳細については今後の検討課題としたい。
- (注5) 付記のとおり、本研究のベースとなるものを2006年度の日本保育学会にてポスターという形式で発表を行った。ポスター発表は興味のある研究発表へ赴き、個人的なやりとりを通じて研究を深めると言う役割を担っている。当時の発表では、残念ながら教員よりも圧倒的に「学生」と思われる人々からの反応を多く得たことは、何かしらの示唆を与えることにつながっているのだろうか。

〈引用・参考文献〉

- (1)堀建治「保育科学生に見られる若者像に関する一考察 ―現代の若者像と保育科学生のイメージ差を中心に―」(『日本保育学会第51回大会研究論文集』、1998年 5月)
- (2)吉見昌弘・堀建治企画自主シンポジウム「保育者養成校と保育現場における保育者像について―養成校の理想と保育現場の現実―」(『日本保育学会第54回大会研究論文集』、2001年 5月)
- (3)「鈴鹿短期大学広報委員会実施アンケート調査」鈴鹿短期大学広報委員会、2006年 5月
- (4)神田大介「第5章ネットから見える現代社会」『考察・ネット社会』  
(<http://homepage1.nifty.com/kanda/net.htm>)
- (5)堀建治「保育方法としての保育ソーシャルカウンセリングに関する一考察 ―学生の「保育実習」を通じての事例を中心に―」  
(『鈴鹿国際大学短期大学部紀要』第26巻、2006年 2月、PP.45-53.)
- (6)四方田犬彦『「かわいい」論』ちくま新書、2006、P.46-65.
- (7)前掲書(6)、PP.104-108.
- (8)J. ボードリヤール (今村仁司・塚原史訳)『消費社会の神話と構造』紀伊国屋書店、1979、PP.109-121
- (9)経済社会研究所経済政策フォーラム『若者は夢を失ったのか―現代社会の若者像』議事録、2005年12月
- (10)小此木啓吾『モラトリアム人間の時代』中公文庫、1984
- (11)静岡大学情報学部情報社会学科 2003年度井川充雄ゼミ卒業論文：「若者の自分さがしとカフェブーム」
- (12)前掲書(2)